

〈半蔀〉の作り物と立花

高桑 いづみ

〈半蔀〉と言えば、夕顔の花とヒヨウタンをあしらった涼しげな作り物が思い浮かぶ。しやれた蔀戸がついていて、後シテが蔀戸をあげて姿を現す瞬間がなんとも美しく、光源氏と夕顔の君が夕顔の花を介して落ちたつかの間の恋をはかなげに彩っている。さらに立花供養の小書がつくと、ワキが夏安居の間に供えた花の供養という能の設定そのままに前場に立花を出す。こうした魅力的な作り物については小田幸子・山中玲子両氏の論述もあるが、他流の演出を参照しながら筆者なりに整理しておきたい。

まず、室町時代の『舞芸六輪』に「つくり物、夕かほはしとみなるへし。つゝみおけ、うちにくをく也」とあるのが古い事例であろう。内に鼓桶(現在ならば床几。現在でも、観世流以外は作り物の中で床几に掛ける。)を置く、とあるので現行と同じような屋体を出して蔀戸を付け、夕顔を巻き付けたと考えられる。少し下って、『岡家本江戸初期能型付』になるとさまざまな作り物が記載されている。

中入ノ間ニ作物出す。大鼓ノ前より、シテ柱ノ前一間斗もさきへ向けて、なをしおく也(頭注 作物、わき正面ニ置)。あけ

ず戸也。やたいをもするか。…一せいでて、シテ出る。(頭注 一セイニセザル吉。アシライ。)…後、不越、段聞出る。…橋懸にて、「れいでうふかく」と云。又、やたいへ入て「れいでう」と謡出しもする。

本文のあとに

一、作物ノ事、蔀のごとくにして、屏風の様にする。中入ノ間ニ立る。作物に夕貞を作て這懸る。「草の半蔀おし明て、立出る御姿、見るに泪もとゞまらず」といふて、作物とる。

とあるので、扉だけ屏風のように本舞台の入り口付近に立てかける形だったらしい。興味深いのは、同型付の(小督)にも「作物、大鼓ノ前ノ通ニぶたひ先まで片折戸をたて、置。…四枚斗屏風ノごとくにして、真中に戸を仕付る」と書かれ、屏風様の形が共通している点である。後の工夫になるが、観世流が立花の小書で出す袖垣の付いた半蔀門(実際、(小督)の作り物に蔀戸を提げるといふ)に発想が近い。偶然であるろうが、小書とともに先祖帰りしたようで面白い。『岡家本江戸初期能型付』では、「やたいをもするか」、その後「草のハしとみおしあけて」でひらき戸なら

は左の手でひらくなどの型も記され、一曲の冒頭には現行の屋体と同じ半蔀戸のある作り物の記載もあるので、現行と同じ形や、半蔀戸の代わりに開き戸を付けた形もあつたらしい。屏風はすぐに取り外したようなので、夕顔を美しく這わせても印象に残りにくい。また、開き戸では「半蔀押し上げて」の詞章にそぐわない、などの理由から現在の形に落ち着いたのだろう。

江戸初期の図としては福王流の『能作物図』がある。「やたひに、夕がほの花をかゝらかする。はしがゝかり、松をこして、おく。中入より後にいづる。寸、前(引用者注 三輪)に同ジ」となっており、屋根のない立方体に蔓が巻き付く図が描かれている。

現在ではアイが退場すると半蔀屋を出し、後シテは大小鼓の(二声)につれて登場して半蔀屋の中に入る。これは上掛りと喜多流の演出だが、金剛・金春流ではアイが引くと後見が引回シをかけた半蔀屋を静かに出す。シテは屋体の中に入っているので登場楽の(二声)はなく、ワキが「ありし教え」と謡ったのち大小鼓の特別な手を聞いて「藜深深く鎖せり」と謡い出し、「窓東に向ふ」の返シで引回シを外して姿を見せる。引回シの有無に応じて登場楽が異なってくるのだが、金剛流の演出は江戸中期の『隣忠秘抄』に記載がある。

金剛は後太夫作物に入り引廻しかけて大小前に置く、窓頭に向ふの打切に引廻し取る。他流は作物仕手柱に置き、太夫一声にて出でハ入る。…中略…太夫の出、前は

アシラヒ、後は三輪のやうにうたふ。前に夕顔の花持ち出るもあり、後壺折にてするも宜し。

享保九年(一七二四)の段階で金春流は(半蒨)を上演曲に入れておらず、天保十年(一八三九)以降上演曲に加えている。『隣忠秘抄』の時点で引回シを付けていたのは金剛流だけだが、引回シで覆う発想は、どこから生まれたのだろうか。

『隣忠秘抄』には「作物初より引廻しかけ小前へ出し、作物へ中入るもあり」ともあり、金剛流では作り物を前場から出す演出も行っていたらしい。たしかに作り物に引回シがかかりその中で後シテが謡い出す点、謡い出す前に(定家)や(檜垣)の後シテ登場と同じ特殊な(一声)を奏する点を考えると、前場から半蒨屋を出してそこに中入りするのが本来のかたちであった、とも考えたくなる。前場から出さなくなった後も引回シをかける形は残った、という経緯である。小田氏は、「中入後、初めに作物だけを出し、シテはそのあとに別に登場して作り物の内に入る現行演出は、亡霊が屋体から登場する手法としてはかなり特異で、原形ではないかもしれない。」と述べている(『能の舞台装置(下)』『能楽研究』第13号)。だが、前場から作り物を出してそこに中入りする演出には少々無理がある。中入り前に「立て花の陰に隠れけり」と謡う以上、引廻シをかけた半蒨屋を立花と見立てることになるからだ。ワキの訪問によって後場で初めて作り物がクローズアップされる場合、中

入前は「かき消す如く失せにけり(三輪)」「たまぐれして失せにけり(檜垣)」と謡って作り物への中入を曖昧にしている。『岡家本江戸初期能型付』にも記述がないので、後場で作り物を出す演出が本来だったと考えたい。金剛流では、江戸中期に前場から出して見たもののうまく行かず、すぐに廃止したのである。後シテの登場に援用した(習ノ一声)は重い習事で、登場後に(定家)は「下ノ詠」、(檜垣)は「アラヤナ」、いずれも低音域でしっとりした謡を謡う。(夕顔)でも「山端ノ伝」の小書がつくと前シテは作り物から登場するが、その際奏する(一声)も同じ手で習イになっている。ところが(半蒨)では登場後に高音域の謡を謡うので(謡本では一声となっているが、節付けは異なる)、鼓の手は同じでも囃子方にとって重い扱いはない。習イにならなかったのは、節付以外に後世の工夫とみなされたからではなからうか。

小田氏は「引き回しを掛けるのであれば屋体の前面と両脇にあまり多くの装飾は付しにくいであろう。作り物が華麗になり過ぎたため、シテを入れて引廻しを付して出す通常の手法が取れなくなってしまうという事情も想定できる。」とも述べている。だが、よく見ると実際の半蒨屋の装飾はそれほど過多ではない。狩野柳雪(一六四七—一七一三)筆の『能之図』(国立能楽堂蔵)では瓢箪は下がっていないが、下まで続く長い蒨戸の上部に花と葉が描かれている。花と蔓が巻き付いているのは前面と屋根のみで、両脇は格子だけである。

現行の金剛流や引回シを用いない観世・宝生流でも花や瓢箪をあしらうのは前面の半蒨戸で、四隅の柱は少なめに蔓を巻く程度である。前面の戸も上半分だけなので、引回シで覆ったとしてもそれほどだぶつかず、見栄えが悪くなることはない。謡本の前付や江戸時代の『作物図』では全面に夕顔が絡みつく半蒨屋が描かれているので繁茂したイメージが強いが、江戸時代でもそこまで大仰ではなかったのではないか。だからと言って、引回シを付けた形が古態だと言いたいわけではない。後シテ登場前にワキが「さながら宿りも夕顔の。瓢箪屢々空し。草顔淵が巷に滋し」と謡うのだから、花や瓢箪は見えていた方がよさそうだから、それ以外で異なるのは、下掛りでは藁屋根を付ける点である。しかし、上掛りでも立花(供養)の小書がつくと藁屋根を付ける。さらに宝生流では引回シも付ける。宝生流は寛政七年(一七八五)の書上で小習之部に「半蒨立花」を挙げているが、その際、こうした意匠にしたのだろうか。文化九年(一八一三)の『伝授事書上』ではさらに「半蒨 立花 右之節中入ニ脇ノ語有之候」と記し、同年の書上ではワキ方宝生流と高安流も習事として立花の語りをあげている。ワキは前場で立花の作り物に向かつて合掌し、中入後にアイに所望されて語りを披露する。語りのあとに常にはない道行も謡う。現在でも、立花はシテ以上にワキの習事として重い扱いで、そのためワキは見掛音取で出る、と森田光春の『能楽覚え書帖』にある。もっとも現在ではふつ

うに〔名ノリ笛〕で登場することが多いようだが・・・

ワキが前場で「草木国土悉皆成仏」と手を合わせ、中入り前に「立花の陰に隠れけり」と謡うのは作り物の存在を前提としているようにも受け取れるが、これも江戸中期以後の工夫である。ただ、寛政七年以前にも替エとして立花を出すことはあつたらしい。手元の資料で確認できるのは『隣忠秘抄』である。

脇に立花の事語るもありとなり。今は世上用ひずと。作物の外に立花を出すことあり、正面カマチより一尺ほど手前に置く、尤も花台に載せ出す、中入に取る。予若き時、御中屋敷にて半蔀仰せつけられ、立花出す事ありやと御尋ねにて、有之候と申上ければ御立花師に仰せ付けられ、出して仕る。將軍様御代の事、即ち御前にて相勤め候。先述したように、観世流では小書がつくと屋体ではなく袖垣の付いた半蔀門に変えて、橋掛りに据える。小督の作物に蔀戸を提げて夕顔と青瓢箪を付け、両袖垣にも花をまきつけた美しい意匠だが、これも江戸中期まで遡れそうにない。文化九年の伝授目録にあがっていないので、観世流ではそれ以降の小書、工夫である。前シテは夕顔の花を一輪持つて登場し、立花に挿して合掌する。後場では〔序ノ舞〕の途中でワキに向かって合掌をし、そこで笛は特別な譜を奏する。後発の小書ではあるが、立花供養の意図を十二分に生かした演出となつたのである。

（東京文化財研究所特任研究員）